

## 解題

小谷 賢（日本大学教授）

本資料集は、元内閣調査室（現・内閣情報調査室（内調））主幹を務めた志垣民郎（2020年に97歳で逝去）が、個人的に保管していた内調の部内資料をデジタル化したものである。志垣は内閣調査室の前身となる、内閣総理大臣官房調査室の創設メンバーの一人であり、その後、1978年に退官するまでほぼ一貫して同組織に勤務した人物だ。キャリア官僚としてこれほど長く（26年間）内調に関わり続けた例はほとんどなく、内調の生き字引ともいえる存在であった。志垣資料は元々、1950年代から70年代にかけて部内で作成されたものであり、原本は現在も内調に保管されているものと推測する。志垣はそれらの一部を自宅に保管しており、その蓄積は膨大な量である。今回、資料をデジタル化することで、初めて内調の部内資料が公開されることになった。

資料の中には、志垣の手による一点ものも残されている。例えば、1959年夏に同僚の山本光利（警察官僚、当時内調第1部主幹）と鈴木光昭（総理府事務官、当時内調第2部2班勤務）らとともに7週間の米国出張に参加しており、国家安全保障会議（NSC）や中央情報局（CIA）の仕組み、さらに各国情勢について詳細なブリーフィングを受けた際のメモが残っている（資料番号0070～0073）。

内調の庇護者であり、CIAとの密接な関係を維持していた自民党政治家の緒方竹虎は、調査室をCIAのような政治指導者に直結する本格的な対外情報機関とする構想をもっており、内調もその方向を目指していたようである。1950年代には志垣らの他にも、山下禎造（警察官僚、当時内閣調査官）らをCIAに送り、その組織や活動について調査させていた。しかし緒方が急逝したことで、内調は多くの予算や権限が与えられないまま、細々と国内での調査活動を行う組織に留まった。志垣資料からは、冷戦期の内調の主な活動領域が、日本国内の左翼勢力の動向を調査することにあつたことが読み取れる。

調査第3部（広報担当）で志垣は世論・言論調査にのめり込み、数多くの大学研究者や言論人と交流を持つことになる。残された志垣の資料も、彼の関心が国内の世論や社会の動向にあつたことを窺わせる。1990年代に内調室長を務めた大森義夫は、「内調が論者たちを結集できたのには縁の下の力持ち、Sさんという白髪の担当者がいた。『文藝春秋』、『中央公論』などの論壇をずっとフォローしていて安全保障論の筆者目録を作っていた」と書いているが、これは志垣のことであろう。

本資料は戦後日本において、内調の果たした役割の一側面を明らかにするものであるが、あくまでも雑多な一次資料集である点には注意が必要である。志垣は膨大な日記やメモも残しており、その一部が岸俊光編『内閣調査室秘録』（文春新書）として出版されている。同書のようなテキストを基に、今回デジタル化された志垣資料を読み進めていくことをお勧めしたい。